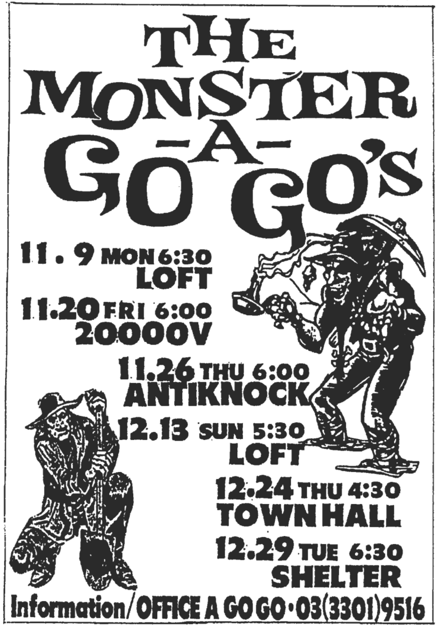
‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις·
ὁ βίος, ὑπόληψις.’

55号 1992.11.9
文・編集・発行
恋 怪子

LIVE：THE MONSTER-A-GO GO'S 1992.10.17 新宿アンティノック 1992.10.24 新宿ロフト


THE MONSTER -A- GO GO'S

11.9 MON 6:30
LOFT
11.20 FRI 6:00
20000V
11.26 THU 6:00
ANTIKNOCK
12.13 SUN 5:30
LOFT
12.24 THU 4:30
TOWN HALL
12.29 TUE 6:30
SHELTER
Information/OFFICE A GO GO・03(3301)9516

SONG FOR THE LIVING DEAD

いつまでも
こんな所にいられるか
欲しいものは手に入ったし
なんの価値も無いぜ

飼い馴らされた犬に
成り下がりたくない
Do You Remember Me ?
俺は　野性の血が騒ぐ

生きながら死ぬか
死んでもまだ生き続けるか
俺の姿を地獄の果てまで
追いかける　Far a Way

なくしてきたものの数だけ
身軽に動けるぜ
生きながら死んだ
お前にゃオサラバだ
満足の出来る　景色を眺めたい
いつか出会ってみせる
SONG FOR THE LIVING DEAD !

生きながら死ぬか
死んでもまだ生き続けるか
俺の姿を地獄の果てまで
見とどける　Far a Way

THE MONSTER-A-GO GO'S（ザ・モンスター・ア・ゴーゴーズ）とは、まずバンド名が楽しい。チラシがいつも楽しい。そして毎回すてきに楽しいステージ。THE MONSTER-A-GO GO'Sの4人はたしかに4人とも魅力ある楽しいモンスターです。それとスタッフの男の子も楽しいからお見逃がしなく。ライブの前はチケットを売ったりしていて、はじまると、前で踊ったりダイブしたり。おわると、汗だくのままチラシ配りをしている。ご本人は「サクラですよ」というけど、サクラだとしても満開の桜で実に楽しい。

10月17日 アンティノック

THE MONSTER-A-GO GO'Sの前にやったバンドはメンバー全員黒の皮ジャンに皮パンツ、髪はリーゼントときめている。このバンドをめあてに来た人たちがいっぱいでみんな立ってきいているのだけど、私は2曲で床にすわってしまう。
権力イコール悪、国家イコール悪という単純さにはうんざりする。ヘルメットにマスクというスタイルで街頭演説（アジテーション）をしている学生運動のロックンロール版といってもいいくらいだ。「オレたちのメッセージをきいてくれ」などというのをきいてメッセージというのは「これがメッセージだ」ということではなくて、音楽を通して伝わるものだろうと、ますますうんざりしてしまう。国家とか権力とかを悪ととらえてそれを他人（ひと）にわからせたいなら、それを音楽でやろうというのなら、もっともっと自分たちの音楽を厳しく鍛えなければ説得力がない。ありふれた歌詞（ことば）がありふれた曲にのっかっているだけでは、なにもとどいてこない。
こういうバンドのあとできくTHE MONSTER-A-GO GO'Sはひときわよかった、楽しかった。一見ふざけているような内容の歌やステージに反抗心がかきたてられる。「権力を倒せ」などとやられても全く反抗心がおこらないのにね。「俺たちみんな地獄行き」という歌詞をきいていて、この瞬間、THE MONSTER-A-GO GO'Sといっしょなら地獄におちたっていいって本気でそう思った。

10月24日 ロフト

この日は17日よりすごかった。アンケートに「ゴーゴーズに何を希望しますか」という項目があったので「今日見せてくれたもの以外に何かあるなら、それを見せて、それをきかせて」と書いた。ほんとにそう思うんだもの。でたらめ、メチャクチャの一歩手前で全開バリバリでふみとどまっているヴォーカル。ガンガン、ギンギンに弾きまくっているクレージーなギター。ほとんど動かず、表情かわらず、淡々としている（みたいな）ベース。仁王さまのようなふんいきでバシバシたたいているドラム。たてのりOK、よこのりOK、なんでもOKのTHE MONSTER-A-GO GO'S！

LIVE：ザ・カスタネッツ 1992.7.14 シェルター 1992.8.9 屋根裏 1992.8.31 ラ・ママ

7月14日、シェルターにREADY'Sをききにいったときに前にやったバンド。ザ・カスタネッツというバンド名、やる気のなさそーなふんいき。ピアニカを吹きながらヴォーカルの人がレゲエのリズムで「そんなシャツ着なくていいよ」なんて歌うし、なんかつまらなそー、と思ったけど、それが大まちがい。演奏にはひきこまれるし、ヴォーカルの人の笑顔にも話にもひきこまれた。で、8月9日屋根裏、8月31日ラ・ママとライブを追いかけた。
ザ・カスタネッツは曲も親しみやすいし、歌の内容も日常生活の風景。日常生活を歌っているようなのに見えてくるもの、感じとれるものは完全に非日常の世界。歌詞（ことば）に力があるということは、そのことばの示す実体に対する感覚や思考が独特であるということである。
「がっかりさせないで」、「一日中雲を見ていた」が好き！パチンコの歌「パチ公」が大好き!!

-がっかりさせないで-

そんなシャツ着なくていいよ
そんな曲聴かなくていいよ
そんな事　知らなくていいよ
そんな口紅塗らなくていいよ

がっかりさせないで　がっかりさせないで

こんな日に出掛けないでくれ
そんな事気にしないでくれ
そんな目で眺めないでくれ
そんな心配しないでくれ

がっかりさせないで　がっかりさせないで

不安な気持ちに追いかけられて
君は自分を振りほどいて行く
君がキライな君のこと
僕は好きなのに

がっかりさせないで　がっかりさせないで

させないで　これ以上

LIVE：マンガンズ 1992.10.25 下北沢シェルター

1989年12月3日、原宿の歩行者天国で、ボイラーズの橋本さんの歌をきいてブルースというものを識（さと）った。1992年10月25日、シェルターでマンガンズの橋本さんの歌をきいて浄められた生命（いのち）を感じた。胸がかきむしられるのではなく、身がひきしめられた。いま、橋本さんはコンクリート・ジャングルの金網のむこうにいる。

コンクリート・ジャングル

ほうり出された野良猫のように 足音を忍ばせ俺の胸の中
泣きたけりゃ泣くがいいさ いまに泣けなくなるから
きのうまでの重い荷物は おろせばいいさ
コンクリート・ジャングル　食うか食われるか
コンクリート・ジャングル　すてるものはないはず
今夜 おまえはどこへ帰る

目をさますのがいやなのか 眠れない夜
金網をこえて来いよ 逃げ出して来いよ
笑いたけりゃ笑うがいいさ 泣くよりゃましさ
嘘をついてかくせるなら うまくだましてくれ
コンクリート・ジャングル のるかそるか
コンクリート・ジャングル かけても いいぜ
今夜おまえは どこへ帰る

コンクリート・ジャングル逃げ出して来いよ　コンクリート・ジャングルかけ出して来いよ
今夜 おまえに何を夢見させてやれるか

LIVE：LAST DANCE 1992.10.29 新宿アンティノック

LAST DANCEのライブ：11/23 昭島市民会館 12/11 吉祥寺クレッシェンド 12/13 新宿アンティノック

THE MONSTER-A-GO GO'Sのほうは

LAST DANCEは、いままで見てきた限りでは、いつもやる前にちゃんと計算がなされていると思えるステージをやっていた。ライブをやる意味をきちんととらえ、計算をちゃんとして、それを土台にして足場にして、そこから翔ぶ、というステージをやっていたと思う。それがこの日はちがっていた。ちゃんと計算はしたと思うけど、そういう土台をけとばして、足場をはずして、裸足でステージにあがってきたような感じがした。ステージの上に大きな岩が4つゴロッとあるようで、こわいくらいだった。はじめて見るバンドのようだった。「いつもの」というところがほとんどない。なにしろ攻撃的（アグレッシブ）なのだ。
3曲目の途中から、こわさをのりこえ「いつものじゃない」「はじめての」LAST DANCEにたちむかえるようになってきた。やる方が足場をはずすと、きく方の足場もはずされる。そして「はじめてのもの」をききながら、あらたにつくりあげていくものがある。
想いがまさにかなえられんとするその瞬間、待ちつづけていたものがまさに来たらんとするその瞬間。その瞬間、心臓がドクッドクッと全身に血を送っているのに、全身は凍るほどつめたく手の先のふるえがとまらない。そういう状態がライブのあいだずうっとつづいていた。その瞬間で時間（とき）が完璧に停止していた。
荒々しく、粗々しく、裸足でかけていく攻撃的（アグレッシブ）なLAST DANCE。そうしたら最後から2曲目にやった新しい曲がまさにそういう歌だった。

イメージだらけのEVERYONE　こなごなに砕いてみせよう
地下室にねむった爆弾　おいらぶっぱなしてあげよう
あのこがちょいときめこんで　あのこがそっとほほえんで
あのこがラインを消して　ダイナマイトをおいらにくれた
イメージだらけのEVERYONE　こなごなに砕いてしまおう
底深くねむった爆弾　おいらぶっぱなしてあげよう

ぶっぱなされて、こなごなに砕けた。それくらい攻撃的（アグレッシブ）なのに、深い悲哀も噴出させる。最後の曲でそれがわかった。そして、この「深い悲哀」がこの日のLAST DANCEとそれまでのLAST DANCEをつなげるたった一本の糸だった。

この日のライブのあと2日ほどして、LAST DANCEの前回の9月15日のライブのテープをきいて、えっ?と思った。9月15日のライブもとてもよかったけど荒々しいとは全く感じなかった。それなのに9月15日のテープをきくと、10月29日のときとそれほどかわらない感じがするのだ。
ウォークマンのマイクと私の耳とは全くちがう働きをする。マイクは音を録るだけで、私の見たこと感じたことまでとらえるわけではないのはあたりまえなんだけど、それでもえっ?と思う。
ステージの上の人たちと私とのあいだに、音楽をとおしてみなぎったはずのもの。それが9月15日と10月29日のLAST DANCEのライブをこれほどちがったものにした。